

地域におけるスポーツ教室開催の意義

～なぜ「三豊市楽しくスポーツ教室」に継続して参加しているのか～

かがわ総合リハビリテーション福祉センター

体育指導員 六条 可奈子、藤尾 博子、大塚 典子、臨床心理士 溝渕 千晴

キーワード： 障害者、スポーツ環境、地域づくり

要 旨

地域で開催している「三豊市楽しくスポーツ教室」に継続して参加している障害者を対象として、障害者が教室に継続して参加している理由をインタビュー調査した結果、継続理由は[他者との交流]、[スポーツへの関心]、[達成感・成功体験]、[運動による健康効果]、[安心感]、[身近な場所]、[家族の理解]、[開催の継続性・規則性]、[使命感]の9カテゴリーに分類された。今回の調査から、地域で教室を開催していく際には市民への障害に対する理解啓発、障害特性に応じた配慮や工夫・スポーツ指導ができる人材の育成、教室開催場所にある福祉・医療等の関係機関に教室の趣旨や目的を理解していただくPR活動に取り組んでいく必要があると考える。

1. はじめに

昨今、我が国では2020年東京パラリンピック競技大会を一過性のスポーツイベントに終わらせるのではなく、東京大会を契機として障害者への理解が一層進み障害者が身近な地域においてスポーツに親しむことができる社会の実現に向けて、障害者スポーツの普及促進の取り組みが求められている。また、平成24年3月に文部科学大臣により策定された「スポーツ基本計画」では、障害等を問わず広く人々がスポーツに参画できる環境を整備することが基本的な政策課題とされている¹⁾。

香川県では、平成26年に香川県障害者スポーツ協会が設立され障害者スポーツの振興、競技力向上等が進められているが、障害者が身近な地域で日常的にスポーツに親しむことができる環境が整っているとは言い難い。

以上の現状も踏まえ、福祉センターでは、福祉センター体育施設だけでなく、地域の公共体育施設を利用し地域に住む障害者を対象とした教室を開催している。中でも「三豊市楽しくスポーツ教室」(以下、「三豊教室」)は、三豊市に住む障害者とその家族・介助者を対象に、毎月1回定期的に開催し14年目と最も長く、地域に住む障害者の参加の場の一つ

として定着していると考えている。現在、自身も「三豊教室」等の地域で開催する教室の運営や立ち上げに関わるようになったことで、改めて地域におけるスポーツ教室の開催の意義を考えそして、今後の事業運営に役立てたいと考えた。

そこで、本研究では、「三豊教室」に継続して参加している障害者を対象として、障害者が「三豊教室」に継続参加している理由を調査することで、地域におけるスポーツ教室開催の意義について考えることを目的とする。対象者には研究の目的、インタビューの録音、データの公表について説明し書面にて同意を得た。

2. 「三豊市楽しくスポーツ教室」について

平成16年度より「三豊教室」開始。平成18年度からは三豊市障害者社会参加促進事業として、当センターが三豊市より委託を受け実施。実施場所は三豊市の公共体育施設や障害者生活支援センター結等。実施種目は毎月異なる(ボッチャ、卓球バレー、卓球、バドミントン等)。29年度の参加者は26名。年齢は10代～70代、障害は脳血管障害、脳性麻痺、脊髄損傷、知的障害等。各回の教室スタッフは、体育指導員2名、障害者スポーツ指導員3～5名、障がい

者生活支援センター結の職員2名、三豊市スポーツ推進委員3名、ボランティア5名。卓球の回は、三豊市体育協会卓球部3名を講師に招き実施。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として本研究は、かがわ総合リハビリテーションセンターの倫理委員会で承認を得た。

4. 方法

対象：平成29年度参加者26名中、過去4年開催した全41回中25回以上の参加の9名中8名(表1)。

調査期間：平成29年12月～平成30年1月。

調査方法：障害者生活支援センター結または三豊市役所内において、体育指導員2名による半構造化面接を実施。録音した内容を文字化後、体育指導員3名により教室の継続理由をカテゴリーに分類。

質問項目：教室開催を知った経緯、参加の動機、継続理由、休日の過ごし方、参加前後で変化したこと、欠席理由、欠席したいと思ったことの有無、参加にあたって調整した又はしていること、教室に対しての要望、自由回答の10項目。

性別	障害名	原因疾患等	受傷発症年齢	年齢	教室参加継続年数	教室開催を知った経緯
A 男	左上下肢機能全廃	脳梗塞	55歳	69歳	14年	体育指導員
B 女	四肢麻痺 知的障害B	脳性麻痺	0歳	18歳	3年	相談支援事業所
C 女	両下肢機能全廃	胸椎胸髄損傷 血胸	33歳	66歳	5年	相談支援事業所
D 男	両下肢機能全廃	脊髄梗塞	63歳	68歳	4年	介護老人保健施設
E 男	右上肢機能を全廃したもの 体幹機能障害により歩行が困難なもの 知的障害	硬膜下血腫	0歳	40歳	14年	体育指導員
F 男	両下肢機能の著しい障害	未回答	29歳	38歳	9年	相談支援事業所
G 男	左手の全指機能の著しい障害 左足関節機能の著しい障害 高次脳機能障害	脳挫傷、脳出血	17歳	34歳	14年	相談支援事業所
H 女	両下肢機能全廃 知的障害	未回答	15歳	29歳	8年	相談支援事業所

表1 対象者

5. 結果

継続理由は[他者との交流]、[スポーツへの関心]、[達成感・成功体験]、[運動による健康効果]、[安心感]、[身近な場所]、[家族の理解]、[開催の継続性・規則性]、[使命感]の9カテゴリーに分類された。[楽しい]からという継続理由も多くの対象者から語られていたが、なぜ[楽しい]と思うのかを再度質問し[他者との交流]、[スポーツへの関心]、[達成感・成功体験]のカテゴリーに分類した。カテゴリーの関係を図解化したものを図1に示した。

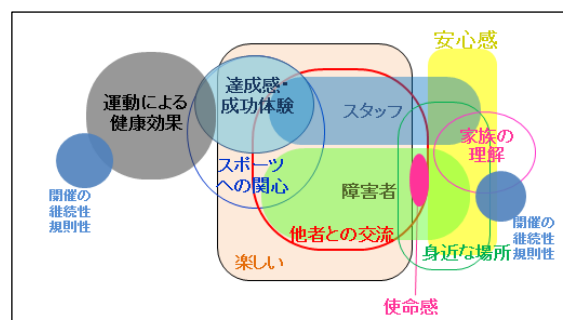


図1 カテゴリーの関係図

図1のカテゴリーの大きさは、基本的にエピソードの量と比例する。それぞれのカテゴリーの重なり部分は、お互いに関連があり共通のエピソードとして見られたものを意味する。

以下、分類したカテゴリー名を[]、具体的な理由を述べた内容を「」内に示す。

(1) [他者との交流]

継続理由として、唯一全員から挙げられていた。教室に参加することで今まで顔見知りでなかった人と知り合えるようになり、その人たちとの交流を引き続き望んでいることが参加の継続に繋がっていた。他者とは、障害のある参加者だけでなくスタッフも含まれている。休日の過ごし方として、1人や家族との外出、自営業の手伝い、入所施設内で過ごすという回答の方が7名いたことから、「三豊教室」や施設・職場以外での[他者との交流]は少ないことも分かった。

B：「(障害者) スポーツ指導員さんとか、教室内で知り合った人たちと色々お話しができるのでそれが楽しみです。」

C：「いろいろな情報を得るということもありますし、でもやはり、知人友人ですよ。交流。」

(2) [スポーツへの関心]

教室内容がスポーツだったことが参加のきっかけとなり、継続にも繋がっていた。

G：「普段することのない運動なので、やっぱ楽しいですね。(普段)する運動でもしない運動でもからだを動かすのが好きだから、やっぱその、いいですね。」

(3) [達成感・成功体験]

体育指導員や障害者スポーツ指導員による指導法や用具の工夫が影響していた。また、[達成感・成功体験]が嬉しさや自信に繋がり、参加を継続する原動力となっていた。

H:「(私にも) 動けるぶんがある一いうて。片手でもできるやつがあったけんな、楽しかった一っていうのもある。」(体育指導員と障害者スポーツ指導員による) 片手でもやっとする人のお手本とかがあったけにな。ほじゃけん、ああ、それしたらええなと思って。お手本とかがあったけに、あーそれだったら私にもできるっていうのがあってな。」

(4) [運動による健康効果]

運動の継続によって健康効果を実感し、さらなる健康効果を期待して参加を継続していた。

C:「1時間半って短いなって思ってたんですけど、結構1時間半って、こう一生懸命、自分がこう集中すると、結構寝つきがいいんですよ。」

(5) [安心感]

障害者を対象にした教室であることで、期待を抱いたり参加者同士で気持ちを共有・共感しやすく気が楽などの [安心感] も継続理由となっていた。

H:「訓練以外で、どういうことすんな一って。障害者でもできるぶんがあるんやろな一と思って。」

C:「やはり障害者のほうが、もう楽にお付き合いできるかな一って。もう少しお友達も作っていきなと思ひまして。」

(6) [身近な場所]

移動の経費や運転の負担が少ないことが継続理由となっていた。

G:「近いからもそうですね。タクシー代もタダじゃないから。高いから。」

(7) [家族の理解]

対象者自身の意思だけでなく、[家族の理解] も参加の継続に影響を与えていた。

B:「バドミントンに関しては、もう全部、母親と相談しながら、(自分の打ちやすいラケットを) 母親に買ってきてもらってますね。」

D:「家族が車で一人で行くというのは、このスポーツだけは、なんか家族がいいということだね。」

(8) [開催の継続性・規則性]

毎月1回定期的に開催されていることで、予定を立てやすく参加を継続しやすいことがわかった。また、日常生活の張りにも繋がっていた。

C:「三豊市はもう1年間を通じて、間違いなくある

っていうのがすごく。はい、心強いです。」

G:「月曜起きた瞬間から、第3土曜日は、『そっか、今週土曜日はスポーツ教室。あと5日かあ。4日3日2日1日(小声でカウントダウン)、(当日は) よっしゃー!』ということ。」

9) [使命感]

[他者との交流] を重ねることで、自分以外の障害者への気づきが増え、さらには参加者のために自分にできることを見つけ、実行しようとする自発的な [使命感] が芽生え、それが更なる参加の動機付けになっている方もいた。

A:「やっぱ気持ちを共有できるのは障害者の中では一番大事やと思う。」「だからできるだけ私はもう、(教室参加者に) 声かける。『元気しよったんな?』て。声かけていっきよる。やっぱそれはな、掛けられたほうもな、周りの人声かけてくれるんは、全然、部外者から声かけてくれるということは、やっぱ社会的にその人を認めたいような気持ちになってほしいわけ。私もそれはあったからな。やっぱ差別じゃなくして、うん、ちょっと一言がな、『あ、私もこの社会でおるんや』という、やっぱ気持ちになると思うんで。」

6. 考察

休日の過ごし方からも、「三豊教室」という [他者との交流] ができる機会は貴重であり、そのことが継続して教室に参加する動機付けや理由になっていると考えられる。[他者との交流] が継続理由となっていることが分かった一方で、[他者との交流] を望まない方、他者とコミュニケーションを取ることが苦手な方にとっては、現在の「三豊教室」は参加しづらい場であることも推測することができる。

福祉センターは、障害のある人が障害のない人と同様にスポーツに参加すること、障害の有無に関係なく互いに人格と個性を尊重しあい支えながら一緒にスポーツを楽しむこと、つまり共生社会の実現を目指した支援を行っている。しかし、今回の対象者にとっては、障害者を対象とした教室であることで [安心感] を持つことができたり自分と同じ障害者と交流できる機会であることに期待を持って参加し

ていることも分かり、我々が目指している共生社会への思いは、対象者の思いとは異なっていたり、今はまだ求められていない可能性も見えてきた。

現在、今後の共生社会への実現を目指した活動の一つとして、三豊市民であるボランティアの方々にも「三豊教室」に参加いただき、スポーツ活動を通じた市民への障害の理解促進などの啓発を図っている。このような地域に障害に対する理解ある人を増やす啓発活動も、当センターの役割のひとつと考える。一方で、一般競技団体や総合型スポーツクラブなどの地域のスポーツ関係団体への啓発は、まだ十分に行えているとは言えない。スポーツ環境に携わる関係者や指導者に障害の理解を深めてもらうことで、「三豊教室」以外にも障害者が安心して参加できるスポーツの場が「身近な場所」に増えていくのではないかと考える。

次に、「達成感・成功体験」に影響していた障害者スポーツ指導員に関しては、当センターが障害者の特性に応じた配慮や工夫、スポーツ指導ができる人材の育成を行ってきた成果であると考えられる。スポーツの工夫は、「障害ゆえにできないとあきらめていた人に対し、スポーツ参加意欲や継続意欲を高める効果がある」と言われており²⁾、今回の対象者にとっても、同様だった。しかし、現在「三豊教室」に、障害者の特性に応じた配慮や工夫のできる人材が揃っているとはまだまだ言えない。人材育成は引き続き、当センターが取り組むべき課題であると考ええる。

7. おわりに

今後、地域で教室を開催していく際には障害に対する理解啓発、障害特性に応じた配慮や工夫・スポーツ指導ができる人材の育成に取り組んでいきたい。

また、今回の対象者が教室開催を知った経緯としては、担当の障害者相談支援事業所職員からの紹介が5名いたことから、センターからの直接的な案内だけでなく、教室開催場所にある福祉・医療等の関係機関に教室の趣旨や目的を理解していただくPR活動をしていくことも、関係機関を介した障害

者への紹介と参加に繋げるために必要な取り組みだと考えている。

今回、インタビュー調査をすることで対象者から「『三豊教室』という楽しみが増えたことで、日常生活が豊かになった」、「『三豊教室』は生き甲斐になっている」等の意見も聞くことができ、「三豊教室」の存在が、障害者の生活に様々な影響を与えているということを知る機会となった。その他にも「三豊教室」が、自分の住んでいる地域での開催であるからこそ、参加することができている方がいることも分かった。障害者が身近な地域においてスポーツに親しむことができるの機会・場の提供、環境づくりを進めていくためのひとつとして今後も地域での教室を開催していきたい。

しかし今回の研究は、一部の教室参加者、その中でも継続して参加している方の結果であり考察である。参加を途中で辞めた方、まだ参加に繋がっていない方もたくさんいる。「他者との交流」を望まない方のように、今回の対象者にとって継続理由となっているものが、現在教室への参加に繋がっていない方にとっては阻害要因になっている可能性も考えられる。これからも福祉センター職員として、地域に住む障害者の社会参加を促進する事業運営を行っていきたい。

【出典先】

平成29年度かがわ総合リハビリテーションセンター研究年報

【引用文献】

1) 文部科学省ホームページ：

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/027/toushin/1361370.htm（地域における障害者スポーツの普及促進について [中間整理]）

2) (公財) 日本障がい者スポーツ協会：新版 障がい者スポーツ指導教本 初級・中級, (株)ぎょうせい, 初版, 東京, 225, 2016